『紛れ』から考えるバリアフリーと尊厳

川内　美彦　様

医療福祉ジャーナリズム分野修士１年
齊藤真美（学籍番号 26S2015）

今回の講義でまず感じたのは、健常者側の無意識の差別や偏見についてでした。自分では配慮しているつもりでも、その「思いやり」が、知らないうちに相手を下に見てしまうことにつながっているのかもしれない、と考えさせられました。
また、自分自身がこれまで考えていたバリアフリーも、かなり一方的なものだったと気づきました。設備を整えればよいという話ではなく、その人が当たり前に使えること、人としての尊厳が守られることが大事なのだというお話が、とても印象に残っています。
特に公共トイレの話は、普段あまり意識していなかった分、とても考えさせられました。「紛れ」が必要な人たちがいる、という話は、自分の中ではかなり大きな気づきでした。
私はがん専門病院で勤務しており、オストメイトの方は身近な存在です。実際、職場のスタッフにもいます。ただ、今回の講義を聞いて、周囲にオープンにしていない人にとっては、多機能トイレは単なる設備ではなく、「事情を知られずに使える場所」なのだと改めて感じました。
以前の私は、「誰でもトイレ」が増えれば解決に近づくのでは、くらいに単純に考えていました。でも今回のお話を聞いて、機能を分散すればいいわけではなく、「紛れ」によって守られている安心感が失われる場合もあるのだと知りました。
また、「紛れ」が必要なのは、その背景に差別や偏見があるからだという言葉も、とても印象に残っています。設備の問題だけではなく、周囲の理解不足そのものが大きな問題なのだと思いました。
今回の講義を通して、ユニバーサルデザインやバリアフリーは、単なる「優しさ」ではなく、人権や尊厳に関わることなのだと学びました。医療従事者として、自分の普段の言動や関わり方についても、改めて考え直すきっかけになりました。
貴重なご講義をありがとうございました。